

1. 研究目的・方法

栃木県鹿沼市の中心部に位置する旧鹿沼宿〔図1〕は日光山登拝の要地として栄えた例幣使街道沿いの宿場町であり、現在でも多くの町家や蔵が現存している。近年、旧鹿沼宿では区画整理事業などによって歴史的建造物が急速に失われている。本研究は旧鹿沼宿に現存する歴史的建造物の実態を明らかにし、それらの歴史的資産としての価値を立証することを目的とする。



これまで、旧鹿沼宿全体を対象とした町並みの調査は行われておらず、建築や町並みの変遷は未だ明らかにされていない。鹿沼に現存する建築物・町並みの重要性を明らかにするにはそれらの変遷を示すことが不可欠であり、町並みの中で各々の建物が持つ歴史的背景を見出すことが必要であると考えられる。

本研究はまず、文献や古写真・絵図を用いて町並みの変遷を整理し、次に悉皆調査を通して旧鹿沼宿に現存する戦前期の町家や住宅について、分布状況や特色などを明らかにし、その中でも特徴的な建造物については詳細調査を行う。次に、旧鹿沼宿における現在のまちづくりの現状や他地域で見られる歴史的建造物の利活用事例を挙げ、現在の旧鹿沼宿に適した歴史的建造物の活用の方向性を探る。

2. 旧鹿沼宿について

鹿沼が宿場の機能を持つようになったのは鎌倉時代で、二荒山を崇拝していた源頼朝が、鹿沼を神領としたことが始まりである。現在の鳥居跡町には日光山一の鳥居が建てられたことから、鹿沼宿が日光登拝の要地であったことが伺える。1637（寛永13）年に日光東照宮が完成し、1645（正保2）年に東照宮への例幣使派遣が決まると、鹿沼宿は例幣使街道の宿駅となり、本格的に宿場町として発展した。

1890（明治23）年に、宇都宮と日光を結ぶ鉄道が開通し、鹿沼駅が開設され、さらに同年には下野麻紡織工場（現・帝国繊維鹿沼工場）が開業している。鹿沼駅と下野麻紡織工場の出現は、水田が主であった一帯の景観を一変させ、市街地を拡大した。また、1884（明治17）年に上都賀郡役所が洋風建築で建てられるなど旧鹿沼宿にも洋風化の波が及んだ。1929（昭和4）年には、東京と日光を結ぶ東武日光線が開通し、鳥居跡町に新鹿沼駅が開設されると、南に市街地が拡大した。

第二次世界大戦を経て1948（昭和23）年、鹿沼町は市制を施行する。この頃から大谷石や深岩石を用いた石蔵が急激に増加し、それまで土蔵が多かった蔵の町並みに変化が

起こる。1970年代には店舗の大型化や高層化が見られ、町並みは大きく変化した。

1980年代以降、郊外化や大型商業施設が出現したことにより、旧鹿沼宿の個人店舗は衰退し、空き店舗や空き地が増加した。1970年代には12,438人だった旧鹿沼宿の人口も、2000年には5,593人に半減し、旧市街地の衰退は止まらない。2006（平成18）年には下横通りの大幅な拡幅・延長や「下横町周辺土地区画整理事業」により旧鹿沼宿の町並みは大きく変化した、今日に至る。

3. 旧鹿沼宿に現存する歴史的建造物の実態

3-1. 分布

悉皆調査の結果、旧鹿沼宿に現存する歴史的建造物を154棟確認できた。過去の災害をみても、町並みを一変させるような記録は残されておらず、また今回把握できた建造物の建造年代からみても、江戸後期から昭和初期に建てられたものが幅広く現存していると考えられる。

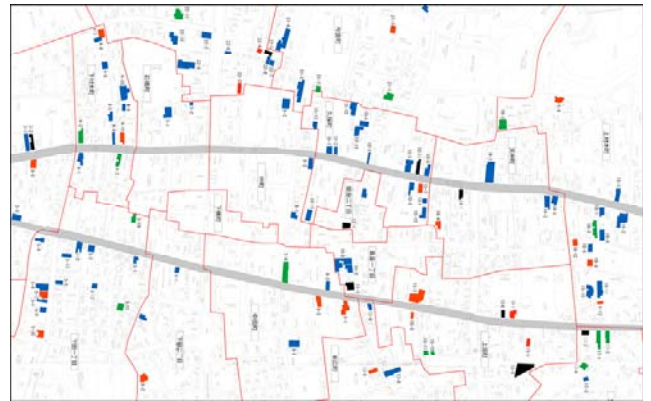


図2 歴史的建造物の分布図

3-2. 外観上の特性

現存する154棟を屋根材料で分類すると、亜鉛鉄板葺が111棟、瓦葺が30棟、その他13棟で、約70%割を亜鉛鉄板葺が占めている。また屋根形式で分類すると、切妻が65棟、入母屋が25棟、寄棟が24棟、その他¹⁾が40棟と、切妻が最も多い。材料と形式の組み合わせでも切妻屋根の亜鉛鉄板葺が66棟であり、これが今日の旧鹿沼宿の歴史的建造物の典型であると言える。

3-3. 街道沿いに現存する歴史的建造物

154棟中、街道沿いに確認できるのは65棟である。1806（文化3）年に作成された『日光道中壬生通分間延絵図 第二巻』²⁾〔図3〕における鹿沼宿は平入の建物が75%、妻入の建物が25%の割合で描かれており、平入と妻入が混在する町並みであったということが分かる。また、1921（大正9）年に作成された『鹿沼町実景』³⁾〔図4〕及び、明治から昭和にかけての古写真においては、切妻・平入、次いで、入母屋・妻入の建造物が全体の割合を占めている。このことから、大正期においても旧鹿沼宿は切妻・平入と入母屋・妻入が多く存在する町並みであったことが分かる。『日光道中壬生通分間延絵図』における同街道沿いの宿場の町並みと比較しても、旧鹿沼宿における妻入町家の割合

は極めて高く、独自の町並みを形成していたと言える。



図3 江戸期の鹿沼宿



図4 大正期の鹿沼宿

4. 詳細調査

悉皆調査の中から、山野井家住宅（下材木町）、岡本歯科医院（下材木町）、福田家住宅（上材木町）の3棟について詳細調査を実施した。山野井家住宅は店舗棟の外観にパラペット方式による洋風意匠を採用し〔図5〕、岡本歯科医院は医院棟を本格的な洋館としている。両者とも居住部分は和館としている。この2棟は、かつては鹿沼に相当数存在したと考えられる近代町家⁴⁾の最後の2棟である。福田家住宅は鹿沼宿を代表する豪商の住宅であり、旧鹿沼宿に現存する最古の町家である。ほぼ当初のまま現存しており、鹿沼宿として栄えた時代の様相を今日に伝えている点で非常に貴重な建造物である。3棟に共通してみられる欄間や書院に用いられた鹿沼組子⁵⁾や木工細工は鹿沼宿の職人技術の高さを今日に伝えている。



図5 山野井家住宅 立面図 左：店舗棟南面 右：東面

5. 旧鹿沼宿における歴史的建造物活用の現状と提言

旧鹿沼宿には「今宮神社祭の屋台行事」という、多くの観光客を集める、江戸からの歴史ある祭行事が今日も行われ、使用される彫刻屋台は、古くは江戸期建造のものも現存している。また、ここまで述べてきたように、旧鹿沼宿に現存する歴史的建造物は長い年月をかけ旧鹿沼宿らしさを重層的に形成してきた。両者は旧鹿沼宿の歴史を今日に伝える貴重なまちづくりの資産と言える。彫刻屋台は27台の内14台が市の有形文化財に指定される等、積極的に保全されている。歴史的建造物については旧柳田治平商店の店蔵及び袖蔵、掬翠園の慶雲郷などが、近年、市の保全活用対象となったばかりである。屋台行事に加え、歴史的建造物の保全活用を進めることは、旧鹿沼宿の歴史を尊重した、個性あるまちづくりを可能にするだろう。また、それにより、両者が魅力を高め合い、屋台行事の似合う舞台としての町並みの形成に繋がると考えられる。歴史的建造物や屋

台行事、彫刻屋台等の歴史的資産を一体と捉え活用することは、旧鹿沼宿にしかできないまちづくりである。

6. 結論

本研究により次のことが明らかになった。

①旧鹿沼宿には現在 154 棟の歴史的建造物が確認でき、内 66 棟が切妻屋根の亜鉛鉄板葺で、比較的安価な亜鉛鉄板葺の建造物が急増しているのが現状である。また、江戸後期以降の建造物が幅広く現存しており、福田家住宅に代表される伝統的町家や山野井家住宅に代表される近代町家など、各時代の遺構が確認できる。

②街道沿いに確認できる町家は 65 棟である。切妻平入の町家が半数を占め、次いで入母屋妻入の町家が多い。近隣地域と比較しても入母屋妻入の町家が多く存在することは特徴的である。また、旧鹿沼宿の平入と妻入が混在する町並みは過去から継承されたものであることが判明した。全国的に見ても、平入と妻入の町家が混在する町並みは例が少なく、旧鹿沼宿が継承してきたこの特徴は貴重である。

③本研究に際し3棟の歴史的建造物の調査を行った。その内2棟は大正後期から昭和初期に急増した近代町家の遺構と考えられ、旧鹿沼宿に現存する最後の2棟である。いずれも街道沿いに洋風の意匠を付した店舗や医院部分を持ち、居住部分は和館とする建造物であり、鹿沼の町家の近代化を示す貴重な遺構である。福田家住宅は旧鹿沼宿における最も古い町家と考えられ、江戸の宿場時代の風景を今日に伝える貴重な遺構である。

歴史的建造物の活用は、その地域の特徴を尊重したまちづくりを実現させる。また、地域の特徴を認識し、尊重することにより、住民は地域に誇りを持ち、連帯感あるコミュニティを形成することが可能となるだろう。「今宮神社祭の屋台行事」と同じように、旧鹿沼宿の歴史ある町並みが積極的に保全・整備され、まちづくりの重要な資産であると認識されることを願ってやまない。



図6 筆者が展開する「歴史を活かしたまちづくり活動」
左：活動紹介フライヤー 右：研究報告会の様子

注) 1_未確認や複合形状のもの等 | 2_『日光道中壬生通分間延絵図 第二巻』 児玉幸多監修 佐々藤雄発行 1990年 | 3_『鹿沼町実景』 松井哲太郎著 下野時報社発行 1921年 | 4_大正以降に出現した3階建てや、洋館を付設または外観に洋風を採用した町家 | 5_栃木県伝統工芸品に指定される木工細工